

林陽寺報

さくら

ホームページ

林陽寺

検索

岐阜市岩田西 3-402

林陽寺

058-243-1380

ご先祖様 年に一度のお里帰り 私達は ご先祖様に守られている お盆の心

お盆

令和も二年となり、新たな気持ちでと思つていた矢先、コロナウイルスが世界に蔓延し、今までの日常と異なった日々を迎える事となりました。まさに「諸行無常」ですね。「コロナ自粛」により仏事もままならぬと言つた世相で



すが、昔から「人心乱れば、鬼心乱る」と言つて、この世の生きとし生けるものが落ち着きを失い、世の中が乱れるということですが、

やはりご先祖を敬い、手を合わせ祈ることも大切ではないでしょうか。特にお盆は、日本人の持つ美しい宗教行事です。家族揃つてあの世からのお客

様を懇ろに迎え、落ち着いた一時を過ぎましょう。コロナによりいつものお盆行事は困難かもしれませんが、精一杯勤めたいとおもいます。

当寺におきましても、八月七日のお盆の法要(施食会)に始まり、二十四日の地藏盆までいろいろな行事を勤めます。どうぞご先祖様を偲んでお参りください。

『盂蘭盆経』というお経によりまずと、お釈迦さまのお弟子で「神通力第一」といわれる目連さまが、ある日、亡くなった自分のお母さんがどうしているのだろうかと神通力を通して、極楽浄土や天上界を探しましたが見つかりません。なんと、お母さまは餓鬼道に墮ちて、大変な苦しみに喘いでいました。食べ物や水を差し上げましたがあつというまに燃えつき、何も口に入らないのです。びつくりした目連さまは、お釈迦さまのところへとんで行き、どうしたらお母さまを救えるか相談しました。すると、お釈迦さまはこうおっしゃいました。

「目連よ、おまえのお母さんは決して

悪い人じゃなかった。とてもやさしい人だった。しかし、ほかの子はどうでもいいという気持ちだった、平等でなかった。我が子だけを愛するという、深い愛欲にとりつかれ、余りにも自分勝手であつたため、餓鬼道に落ちてしまつたのだよ」

「ああ・・・」目連さまは、なげき悲しみました。

すると、お釈迦さまは、「救つてあげたければ、八(七)月十五日はお坊さんたちの長い修行の終わる日、その日にできる限りの飲食をさしあげ、亡き人に供養をしてあげることだ」とおつ



しやいました。その通りに、目連さまがすると、お母さんは餓鬼道の苦しみから救われ、極楽の世界に行かれたという事です。



ご家庭のお盆飾りの一例

お釈迦様は「丁寧に供養すれば、その功德力により多くのご先祖や無縁の人たちも苦しみから救われ、今生きている我々も幸福を得ることができよう」とお説きになられたのです。

写真は、お盆の時期の林陽寺の本堂の様子です。施食棚を出して供養します。各ご家庭でもお仏壇をお掃除し、お花や供物をお供えして、家族揃ってお寺やお墓にお詣りし、今生きていることに感謝しましょう。

境内清掃

コロナウイルスにて自粛が続く中、大半の行事が中止・延期の最中。五月三十一日、早朝より護持会の皆様方による境内清掃が行われました。サクラの木の手入れ、サツキの選定、屋根の点検、ガラス拭きなどお盆を前に汗を流していただきました。有り難うございました。



坐禅と写経

禅宗の修行の中心は坐禅です。調身・調息・調心に心がけ一度坐つてみませんか。当山では、第二日曜日八時から一時間坐禅とお話の会を、第四土曜日十時から十一時まで写経の会を設けています。誰でもお気軽にお出かけください。



コロナウイルスとの日々

令和二年のお正月の新聞に、中国武漢にて原因不明の肺炎が発生しているとの新聞記事。またたく間に広がり今や世界中で六百万人が罹患し三十二万人が死亡。日本においても一万七千人余が罹り九百人近くが亡くなった。岐阜県においても百五十人、七名が亡くなった(六月一日現在)。

令和二年五月五日の中日新聞の社説に「政府は新型コロナウイルス対策の緊急事態宣言を五月末まで延長した。十三の特定警戒都道府県では外出自粛要請などを徹底する一方、それ以外では「新しい生活様式」により感染拡大防止と社会経済活動を両立させる「長丁場」の闘いに移行する方向を明確にした。

新型コロナウイルスは小康状態と再流行を繰り返す一年以上の対策が必要とされ、長期化を免れない。私たちは当面ウイルスと共存せざるを得ず、以前のように無防備な生活スタイルには当面戻れないとの覚悟をすべきだ。同時に、

宣言の延長で休業が長期化する事業者は一層窮地に追い込まれる。中小企業への最大二百万円の持続化給付金や従業員の雇用を守る雇用調整助成金の上乗せ、テナントの賃料負担軽減など、政府は早急に追加支援を講じるべき事態である。

米国は感染拡大が峠を越したとして経済活動再開に動きだしスペイン、イタリアなども厳しい外出制限を緩和して経済活動を再開させていく方針だ。いずれも再流行リスクを承知で、ここで再始動させなければ経済が致命傷を受けかねないというギリギリの決断だ。短期間の終息が困難な以上、経済社会を維持しながらの持久戦に挑むのはやむを得まい。しかし国民の生命がかかる問題で失敗は許されない。それには国民の生活様式転換に加えて、医療、検査体制の充実が不可欠だ。

「新しい生活様式」とは、個人レベルでは感染拡大リスクが高い「三密」の回避、外出時のマスク着用、こまめな手洗いや人との距離確保の徹底。仕事面では、テレワーク、時差出勤、テレビ会議などの利用継続だ。ストレスが多い日常が続くが、何とか心身を適応させる努力をしたい。

我々人間は常にウイリスと戦い、その都度解決の道を模索してきた。歴史を遡れば、約千三百年前に大仏造立を決断した聖武天皇の御代には、大地震や飢饉が続き、疫病（感染症）が流行した。高熱を発し、死亡率が高く、治っても痕（あと）あばたを残す「天然痘」であり、平城京にも蔓延した。当時の国政を担っていた藤原氏の四兄弟が全員病死するなど、朝廷は大混乱。日本の総人口（当時）の約三十％に当たる百万〜百五十万人が亡くなったという。相次ぐ国難に悩んだ聖武天皇が七四三年（天平一五年）、国家の安寧や疫病から人々が救われるこ

とを願って大仏の造立を命じた。日本での疫病は、海外から持ち込まれることが多く、当時は朝鮮半島の新羅に派遣した使節（遣新羅使）を通じて入ってきたと言われている。

改元も疫病と関係があった。令和は最初の年号の「大化」以降、二四八番目の元号だが、改元理由で最も多いのは、自然災害や戦乱、疫病など大きな異変が起きた時の「災異改元」で、百回を超える。

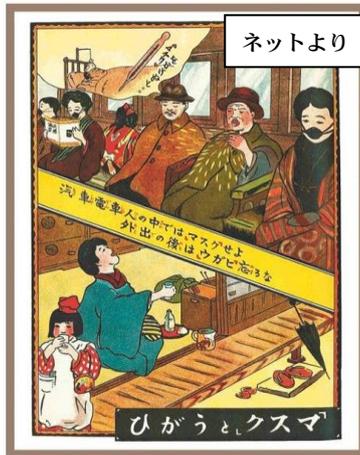
これは新天皇の即位による改元の七四回よりも多い。災異改元のうち、三分の一の三十数件は疫病の流行で多くの死者が出た時だった。一番多かったのが天然痘で、続いて高熱と全身に発疹が広がる麻疹（はしか）。大勢の人が次々と亡くなっていく原因も分からず、治療法もなかった時代、日本人は祈り、改元するほかに対処の方法がなかった。

「疫病退散」はすべての人の願いだった。東京の夏の夜を彩る「隅田川花火」もそれに由来する。

享保十八年、江戸時代の八代将軍・徳川吉宗の時、「大飢饉や江戸に流行した疫病による死者供養と災厄除去を祈願して」、両国川開き（水辺の納涼祭）が行われ、その初日に花火が打ち上げられたのを起源としている。

近くでは、百年前の「スペイン風邪」といわれる感染症であり、

心得100年前も同じ



未曾有の感染者を出したパンデミック（世界的大流行）があった。スペインインフルエンザで、国内で約三九万人が犠牲になったとされる。県内でも再流行を繰り返し、終息までに八千人以上が亡くなった。切迫した状況を市町村史

や内務省報告書から振り返ってみる。（令和二年五月四日）岐阜新聞朝刊 堀尚人

「高山の火葬場に棺が毎日十数個並んで僧侶の読経も待たず火葬されたものもあったと云う」旧大八賀村（現在の高山市）の村史には、当時の混乱ぶりの一端が記される。同書によると、大正七年十月十二月に大野郡（旧高山町合む）で五一四人、吉城郡で二一七人が死亡。村内では三五人が亡くなった。

旧丹生川村（高山市丹生川町）の村史は、大正七年十一月十二月の流行で、小学校本校と七分教場を七〜二十日間閉鎖したと記録。全児童の九割に当たる八七一人が罹患し九人が亡くなっている。村役場を通じて家庭に配布された文書は、悪性感冒（ウツリガイキ）と病名に方言の注釈を付け注意喚起。その記述からは、現在と同じように隔離や飛沫感染防止の措置が取られていたことが読み取れる。

一、児童の身体に少しでも怪しいと思われる様子(頭痛・発熱)が見えたら、早く医者に見てもらおうこと

一、誰でも此の感冒にかかれば、別の室に寝させ、鼻汁や痰を能く消毒すること

一、病人の咳く時は、唾が他人にかからぬ様にすること

旧藤橋村(現在の揖斐郡揖斐川町)の村史には「東西横山でも亡くなる人があり、殊に発電所工事中で人口もふくれあがっていて工事人夫の死亡者も」と密集の影響をうかがかかったことになる。

いったん落ち着いたものの、「向寒の候に及びて神奈川、三重、岐阜、佐賀、熊本、愛媛等に流行再燃の報あり」(内務省報告)として、大正八年十月下旬から九年六月の第二波で一四〇九人、十年一月から六月の第三波で七八人がそれぞれ県内で死亡。終息までに実に二年半を要したことになる。
……県内死者の総数八四八五人は濃尾地震(明治二四年)



の全国の犠牲者数七二七三人を超えている。

内務省報告書の古書を購入した国立病院機構仙台医療センターの西村秀一ウイルスセンター長は「未知のウイルスへの対処は今も昔も変わらない。スペインインフルエンザは集団免疫が形成され終息したが、今回のコロナでは国民はまだほとんど免疫を持っておらず、いつとき収まっても流行はまた勃発する」と警鐘をならす。

その上で、「マスク」を着用は

効いていると思っており、次にやってくる流行でも今回学んだ対処をきちんとやれば、光は見えてくる。ウイルスを正しく恐れ、助け合って長期戦を戦うことだ」と指摘している。

当山の過去帳から見ると、大正七年五人、八年六人、九年十四人、十年九人と確かに多く、九年以降は第二波と思われる。

いずれにしても免疫が形成されるまでは、コロナ時代の「新たな日常」を模索して、従来と異なった生活様式への転換が求められるであろう。それは一年か二年か、我慢の生活である。

お庫裏のツツヤキ

「ドクダミ パワー」

左手の薬指にモゾモゾつと感じた途端に、シカと痛みが走った。慌てて布団を撥ねのけると、大きな百足が。左手の薬指が、あつという間に腫れ上がり、ジンジンと痛む。

時刻は、朝五時。噛まれた傷口を摘まんて毒を縛り出すようにしてから、

ドクダミを摘んでラップに挟み込み、振り粉木でドンドンと叩いて潰し、潰れた物を指に巻き付けた。心無しか痛みが和らいだような気がした。

生憎、医者は休み。仕方なく二日間ドクダミ湿布を続け、腫れはひいたが、まだ熱があつたので熱冷シートを巻き付けて、やっと治まった。



なぜ、ドクダミを使ったかという点、以前「知恵袋」という本に、虫刺されには、ドクダミの汁が効くとあつたのを思い出したからだ。いわゆる民間療法というものだ。ヨモギやユキノシタにも同様の効果があるという。今のような多くの薬がなかった時代には、人々は治療に薬草を役立てていたのだ。改めて、先人の知恵の素晴らしさを知った出来事であった。それにしても、傷口の痒いこと痒いこと。 《合掌》